

博士論文題目：「平安様」緯錦再考

執筆者：桑原(福本) 有寿子

《要約》

古くから盛んに研究が進められてきた中国史ではあるが、遼、金、元などの遊牧民族が建国した国家については、資料の少なさもあってか漢民族の建国した諸国の研究と比較すると残された課題が多い分野であった。中国東北部からロシア沿海地方にかけての墳墓の発掘は、寒冷で乾燥した地域であるがゆえに保存状態が極めて良好な出土品が多く、1970年代に入って活性化する。80年代に入ると出土資料の整理と公開が進み、今まで詳細が明らかにされて来なかった遊牧民族の歴史が徐々に解明されるようになった。染織品の調査研究および整理公開は他の出土品と比較するとやや遅く、1990年代以降に本格化する。とりわけ遼代(907～1125年)の遺跡から発掘された錦の出現は、日本の染織史研究者を驚かせることとなった。従来、平安時代に起こる文化の国風化の流れのもと、日本で独自に開発されたと考えられていた織組織をもつ錦が、遼代の遺品の中に多数含まれていたのである。この錦は日本では平安様緯錦と称しており、現在中国では遼式緯錦と呼称されている。これらの錦は織組織のみならず文様にも共通する作例があることが確認され、近年の研究では平安様緯錦もわが国固有の錦ではないと考えられるようになった。また、平安様緯錦を発展させて成立したと考えられてきた鎌倉時代の錦に関しても、そのルーツの再考が求められている。

そこで本研究では、中国遼代染織品の発見がもたらした新見解をもとに、日本の平安時代と鎌倉時代にみられる染織品、とくに複様錦と呼ばれる種の錦の発生と展開について、我が国も東部ユーラシアに属する一つの文化であったという視点から再考した。第1章では、日本伝来の平安様緯錦の作例の紹介と分析を通して、従来は日本風の錦だと捉えられていた平安様緯錦の遺例に中国新出土裂との共通点が存在することを指摘した。第2章では文献資料に見られる舶来の錦「唐錦」に着目し変容を辿ったところ、西暦900年頃から950年頃にかけて時代を経るに従い唐錦に変化が生じていることと、この変化の時期が複様緯錦(奈良時代及び唐代の錦)から準複様緯錦(平安時代及び遼代の錦)へ変化する時期に一致することを指摘した。第3章では、中国新出土裂と日本伝来裂を同類のものとして同列に据え、両者の文様から年代によって見られる文様の特徴と展開の様子を観察した。準複様緯錦の文様を5種類に分類して分析を行った結果、それぞれの文様構成の登場年代を検証することで、今まで叶わなかった、伝承が消失した準複様緯錦のおおよその製作年代を文様から推定できるようになった。第4章では、第1章から第3章までに判明した事象を踏まえた上で準風通様緯錦(鎌倉時代の錦)を再考し、準風通様緯錦は、中国に産した準複様緯錦を日本の技術で模織したものであるということを指摘した。